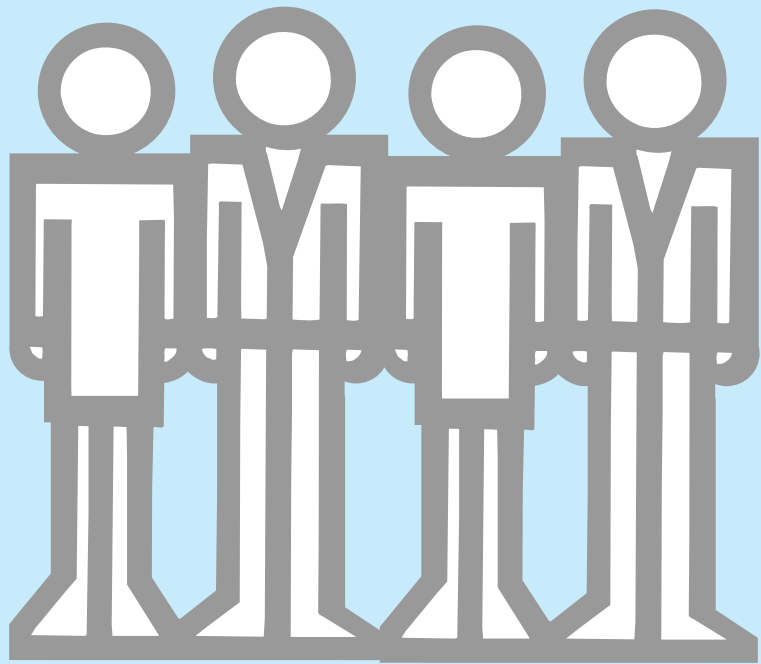


日本人の4つの生き方

本当の豊かさを手に入れるためにいま求められているのは、まず、自分の幸せの形を知ること。アンケート調査の結果から描かれた4つの生き方の「いま」と「これから」を通して、それぞれが幸せに生きる方法と、多様な価値観が共存する社会のあり方を探る。

小山 梓
HRI社会研究部 研究員



「世代」という枠組みを超えて

HRIでは過去3年間に渡り、「シニア世代」「ミドル世代」「ヤング世代」各世代別の調査を行ってきた。これを受けて今年度は日本人のライフスタイルの全体像を把握することを目的として、世代横断型の調査を実施した。

基礎分析として年代間の比較を行った結果からは、年代間の差異や共通点ある年代に特徴的な傾向など、年代によるさまざまな

まな特徴が表れており、巻末のデータ集で詳細にまとめている。そこでここでは年代や世代といった枠組みを越えて、一人ひとりの生き方や価値観という視点から、あらためて調査結果を眺めるという試みを行いたい。

本レポートでは、生き方・価値観の違いという視点から回答者の類型化を試み、それぞれの現在の暮らしや未来への予測を通して日本人の「いま」と「これから」を展望する。

「生き方」のタイプを探る7因子

回答者の類型化にあたっては、「自分にとって幸せな人生や生活とはどのようなものか、自分なりの基準を持っている」「自分は自分、他人は他人と割り切って物事を考えるかどうか」「他人と割り切って物事を考えるかどうか」など、生き方や価値観について尋ねる36の質問項目から抽出された、7つの因子の因子得点を用いた。

分析に用いた項目の平均値・標準偏差、および因子パターンは次ページの表に示す通りである。項目内容から、7因子はそれぞれ「自己に対する理解度」「主体性の重視」「新しいもの・ことに対する積極性」「将来への展望」「個人志向性」「他者から受ける影響の大きさ」「集団の規範の受け入れ」と解釈された。

■ 「生き方」のタイプを探る7因子（回答者全体の平均値・標準偏差、および因子パターン）

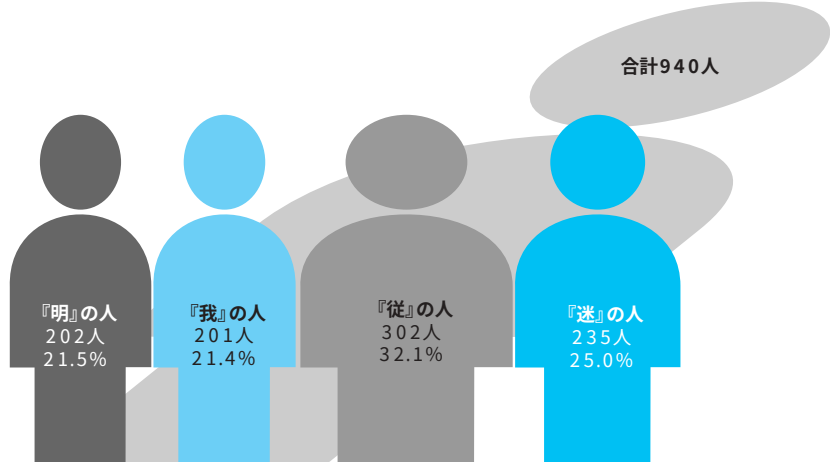
項 目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6	因子7	平均値	標準偏差
◆因子1：自己に対する理解度									
どのようなことをしているときに自分が充実感を得られるか、わかっている	.765	-.053	-.047	.068	.031	-.004	-.009	3.89	.85
自分なりの気分転換の方法やストレス解消法がある	.755	-.125	-.074	.083	.071	-.008	.044	3.89	.89
自分にとって幸せな人生や生活とはどのようなものか、自分なりの基準を持っている	.609	.120	-.073	.056	.022	.052	.050	3.93	.82
結果はどうあれ、自分で試してみることが大事である	.439	.194	.144	-.197	-.140	.015	.007	4.04	.74
◆因子2：主体性の重視									
自分で納得のいかないことはしたくない	-.038	.803	-.093	-.094	-.089	.022	-.012	4.04	.81
自分のことは自分で決めないと気が済まない	-.065	.654	-.035	.082	.083	.048	.026	3.75	.89
社会的評価よりも、自分の価値観を優先する	.036	.547	.030	-.015	.153	-.116	-.018	3.56	.84
自分に対して正直な生き方をしている	.129	.369	.055	.214	-.064	-.014	.045	3.60	.94
◆因子3：新しいもの・ことに対する積極性									
新しい環境に入っていくことに抵抗はない	-.086	-.019	.908	.024	.018	-.122	.002	3.20	1.07
初対面の人には自分から話しかけるほうである	-.089	-.042	.769	-.044	-.020	.028	.049	3.05	1.08
新しいことに挑戦したり、新たに人に会うことが好きである	.237	-.065	.514	.031	-.120	.193	-.077	3.56	.99
◆因子4：将来への展望									
自分の中で本当にやりたいことが何なのかわからない	-.310	.026	.060	-.497	.115	.158	.046	2.87	1.13
自分が望む生き方をするために、具体的な計画を立てている	.009	.106	.102	.491	.113	.348	-.037	2.93	.99
これから先の人生のことは、ほとんど予想がつかない	.032	.076	-.030	-.465	.027	.096	.060	3.47	1.02
自分の信念やこだわりは今後変わっていく可能性がある	.019	-.044	.151	-.447	.080	.254	.010	3.38	1.02
自分の望む生き方を、これから先実現できそうである	.254	.005	.115	.418	.066	.063	.008	3.30	.92
◆因子5：個人志向性									
自分は自分、他人は他人と割り切って物事を考えるほうである	.126	.186	.124	-.149	.537	-.123	-.037	3.42	1.00
仕事上のつきあいでは、個人的に親しくなることは重要ではない	.076	.019	.029	-.079	.505	.011	-.097	2.92	1.05
自分のことに精一杯で、他人のことを考えるだけの余裕はない	-.158	.003	-.049	-.062	.470	.132	-.032	2.74	.95
感情や気分をめぐったに外に出さない	-.066	-.123	-.021	.171	.450	.010	.159	2.81	1.07
一人でのんびり過ごすのが一番好きだ	.063	.061	-.124	-.024	.449	-.018	.025	3.24	1.06
◆因子6：他者から受ける影響の大きさ									
周囲の期待に応えられているか、いつも意識している	-.113	.029	.012	.150	.042	.733	.043	2.88	1.06
自分が他の人にどう思われているのかが気になる	-.010	-.066	-.199	-.165	-.043	.624	-.032	3.20	1.11
人の発言や本に書かれていることなどに影響されて、自分の生き方を見直すことがある	.105	-.026	.087	-.137	.048	.457	-.065	3.23	1.00
自分と関わりのある人については、なるべくいろいろなことを知りたいと思う	.144	.070	.018	-.187	-.153	.394	.113	3.53	.93
◆因子7：集団の規範の受け入れ									
日本の伝統や習慣は尊重すべきである	.012	-.014	.132	-.008	.017	-.109	.745	3.77	.91
この世の中では、義理やしきたりはなくてはならないものである	-.153	.070	.029	.017	-.079	.055	.661	3.68	.91
敬語はなくてはならないものである	.154	.059	-.112	-.081	-.019	.022	.531	4.04	.83
周囲との調和をはかるために自分の主張を抑えることがある	.186	-.179	-.049	-.144	.178	.048	.373	3.72	.78

※ 「あてはまる（5点）」～「あてはまらない（1点）」
最尤法・プロマックス回転による因子分析結果。どの因子においても因子負荷が.35に満たない項目については分析から除外した。

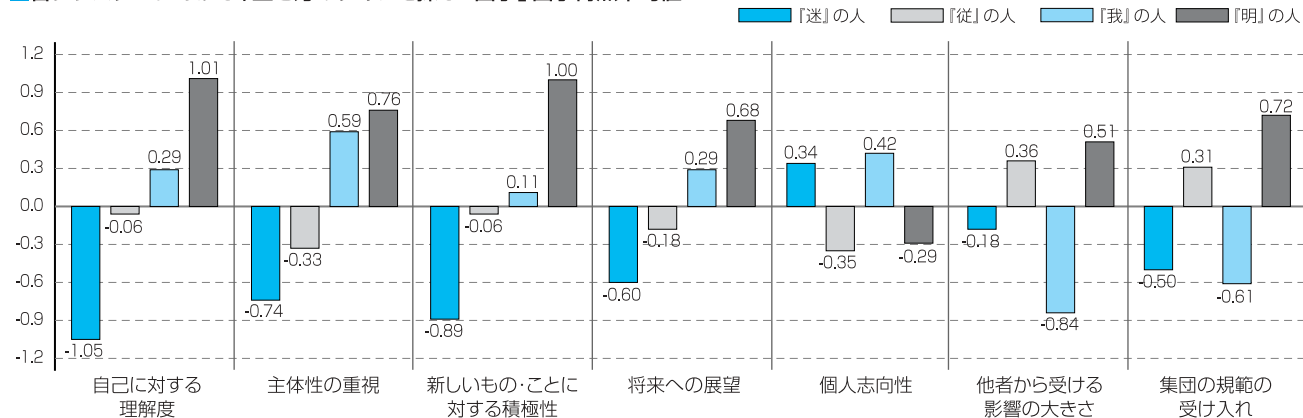
「生き方・価値観から見た日本人の生き方」4類型

7つの因子の因子得点を用いたクラスター分析の結果、回答者は4つのクラスター（群）に分類された。それぞれのクラスターの特徴・構成メンバーについて以下にまとめた。

※クラスター分析とは…複数の観測されたデータ（変数）ケース間の類似度をもとにいくつかのグループ（クラスター）に分類する多変量解析の手法。



■各クラスターにおける「生き方のタイプを探る7因子」因子得点平均値

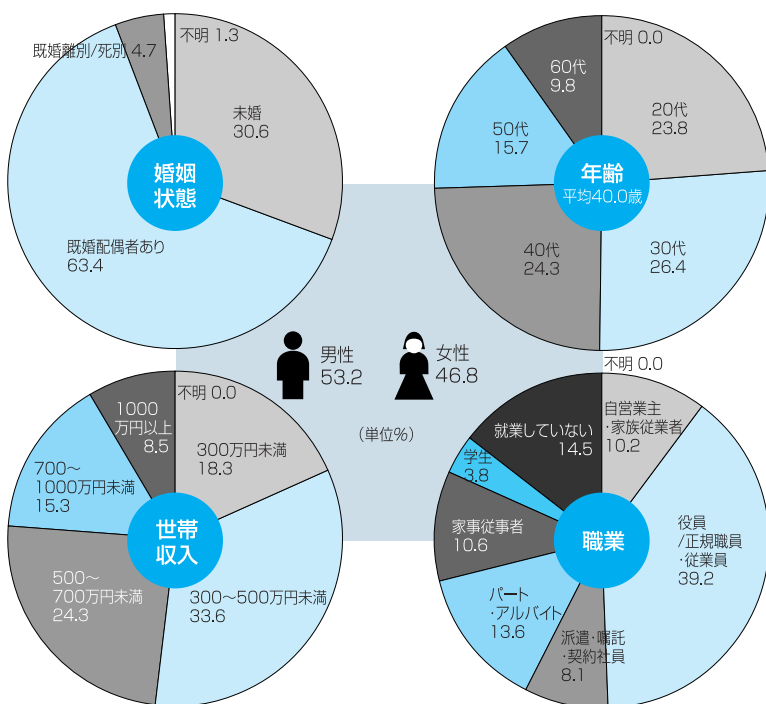


『迷』の人

自分の生き方や価値観が定まらない。周囲からも孤立した状態にある「迷える人々」

「あなたにとって幸せな生活とは？」と尋ねられると困ってしまう…希望する生き方や価値観が定まていない状態にある。また、はっきりとした信念やこだわりを持たないため、強く自己主張をしない。今後の生活や人生についての見通しが不透明で新しいことへの挑戦には後ろ向きである。対人関係では集団の規範をわずらわしく感じていて、積極的に人と関わろうとしないため、孤立しがちである。

このクラスターには20代・30代の若い年代が多く含まれ、平均年齢が4クラスターの中で最も低くなっている。そのためか、未婚者の割合が高く、平均世帯年収が500万円未満の割合が最も高い。職業別では家事従事者、現在就業していない人の割合が低く、役員／正規職員／従業員など「サラリーマン」の多いクラスターとなっている。

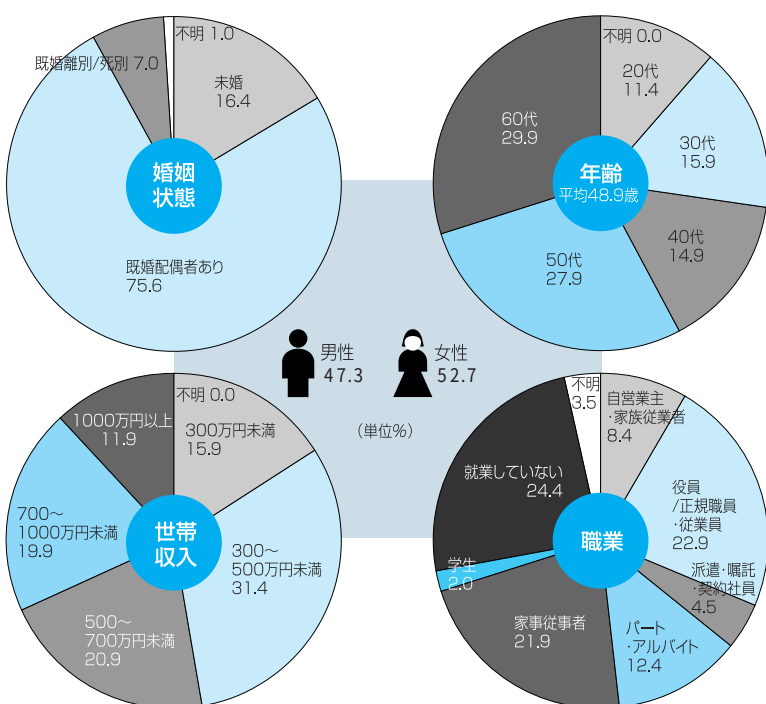


『我』の人

信じた「我」が道をひたすらに行く。人や社会の評価にとらわれない人々

「自分で納得のいかないことはしたくない」という思いが人一倍強い。自分に対して正直であることをモットーとし、他人からの期待や評価にはとらわれない。「自分は自分、他人は他人」という意識が強く、対人関係は希薄である。伝統やしきたりはなくてはならないものという意識は4クラスターの中で最も低い。

このクラスターは50代・60代の占める割合が高く合わせて57.8%を占めている。職業では家事従事者、就業していない人の割合が高く役員／正規職員・従業員の割合が低くなっている。

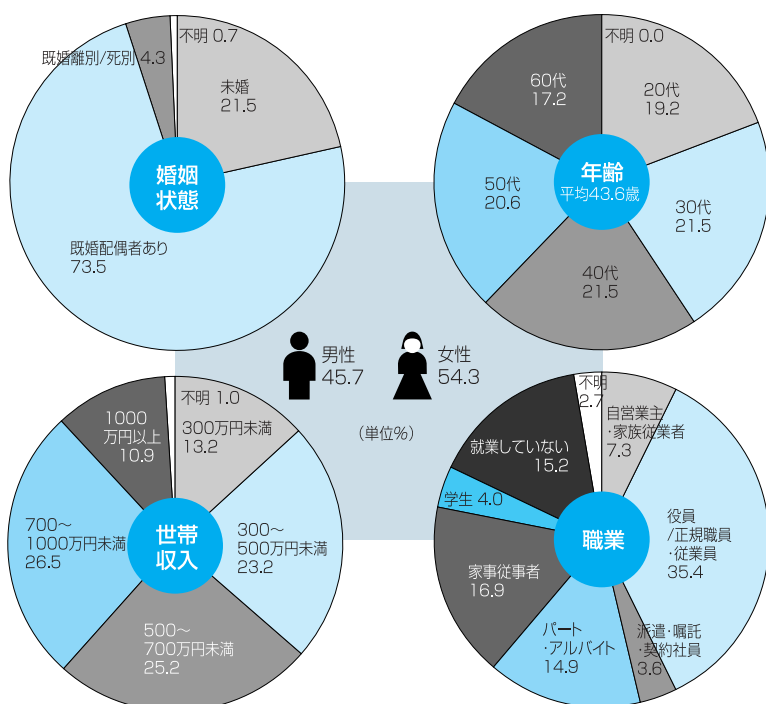


『従』の人

自分の価値観よりも周囲との調和を重視する。流れに逆らうよりも「従」うことを選ぶ人々

自分の価値観を主張することよりも、周囲の人と良い関係を築き、維持することに重きを置く。そのため、自分なりの「幸せ」の基準や今後取り組みたいことはあっても、それを強く推し進めることはしない。人生は予想がつかないものの、自分の信念は変わる可能性があるものと考え、流れにゆったりと身をまかせている。4クラスターの中で最も伝統やしきたりを尊重する。

このクラスターは回答者全体の32.1%を占める最も大きいクラスターである。年代のバランスは20代から60代までがほぼ均等で、性別では女性の占める割合が54.3%とやや高くなっている。世帯年収が500万円未満の占める割合が低く、金銭的な面では最も豊かなクラスターであるといえる。

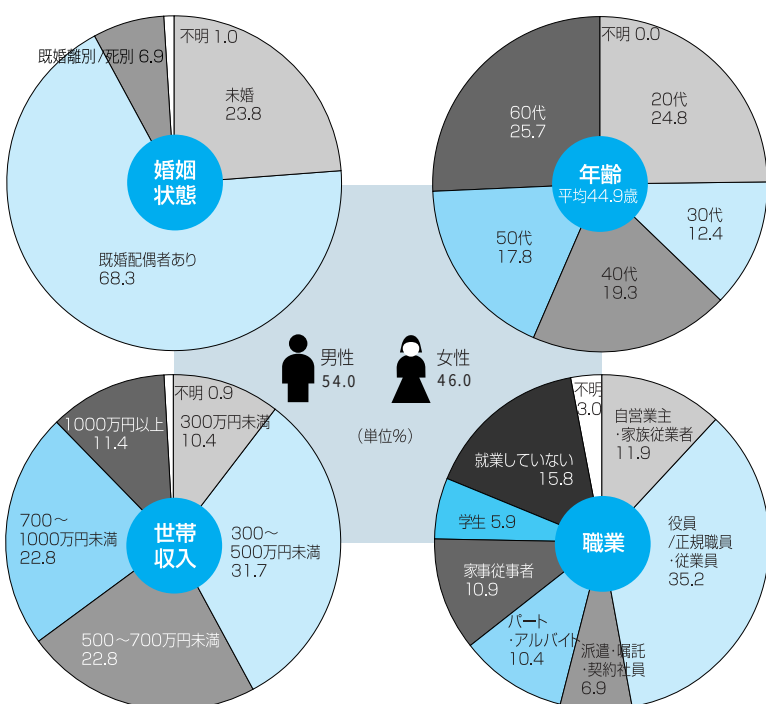


『明』の人

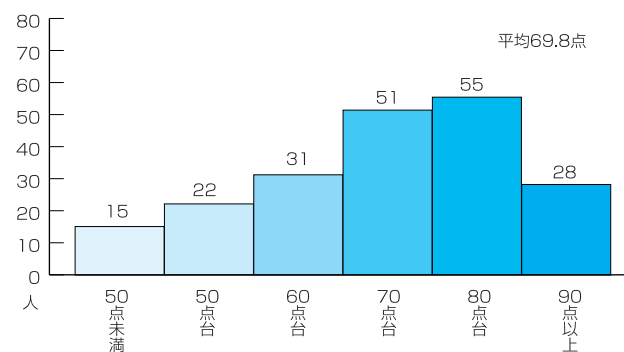
自分の生き方や価値観がはっきりしている。自分についての理解に「明」るく「明」るい見通しを持つ人々

「自分にとって幸せな人生や生活とはどのようなものか」「どのようなことをしているときに充実感が得られるかなど」、自分自身をよく理解し、自分の価値観に従って主体的に行動することを重んじている。新しいことへの挑戦に対して前向きで、明確な将来展望を描いている。対人関係では人と積極的に関わり、その期待や評価から強く影響を受ける。また、集団の規範やしきたりも人一倍尊重している。

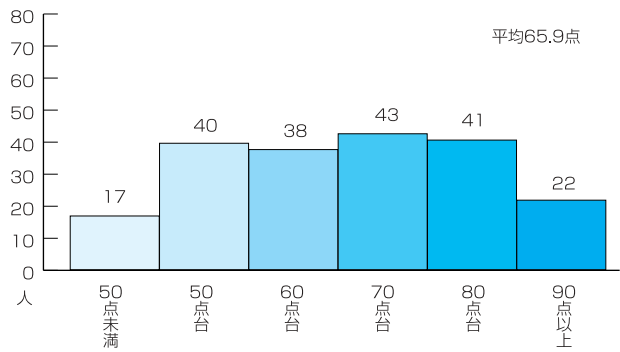
このクラスターは20代・60代がそれぞれ約25%を占めており、30代が12.4%と最も少ない。性別では男性が54.0%とやや多い。



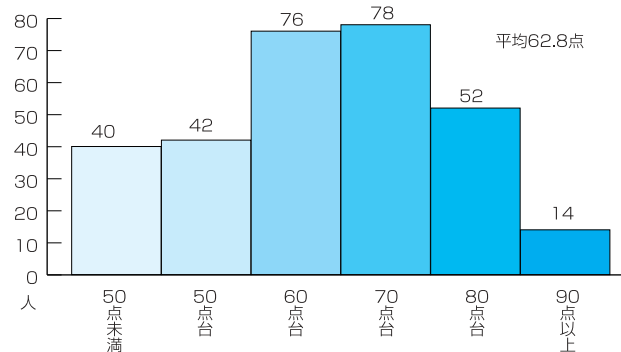
■『明』の人の現在の生き方の点数



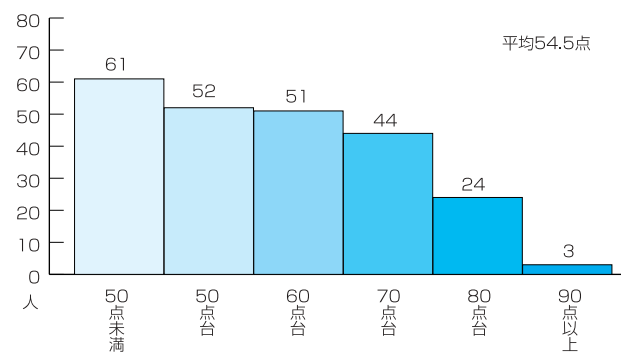
■『我』の人の現在の生き方の点数



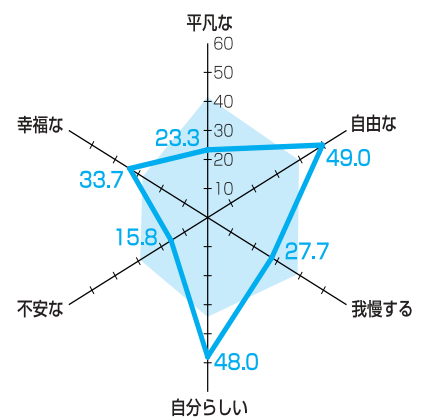
■『従』の人の現在の生き方の点数



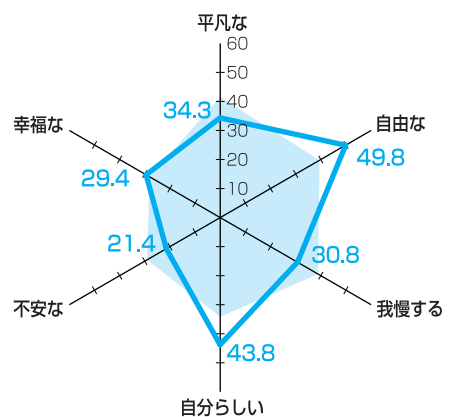
■『迷』の人の現在の生き方の点数



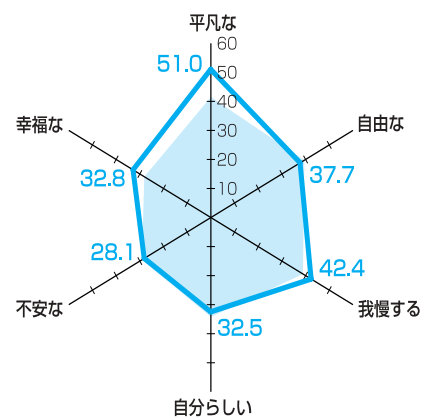
■『明』の人の現在の生活イメージ



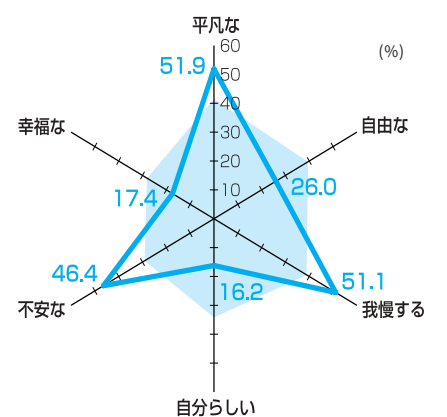
■『我』の人の現在の生活イメージ



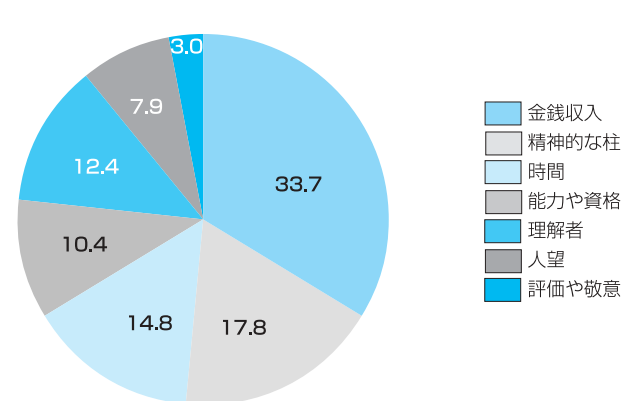
■『従』の人の現在の生活イメージ



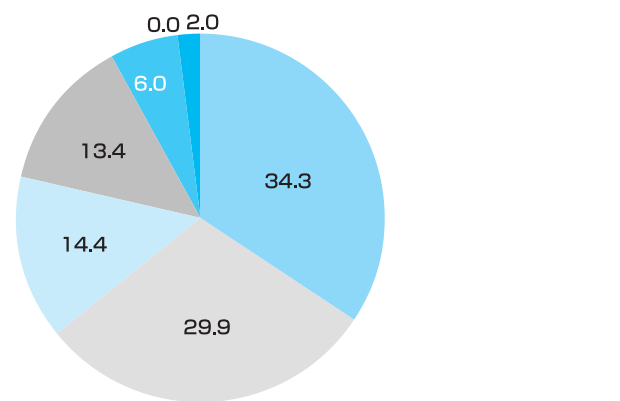
■『迷』の人の現在の生活イメージ



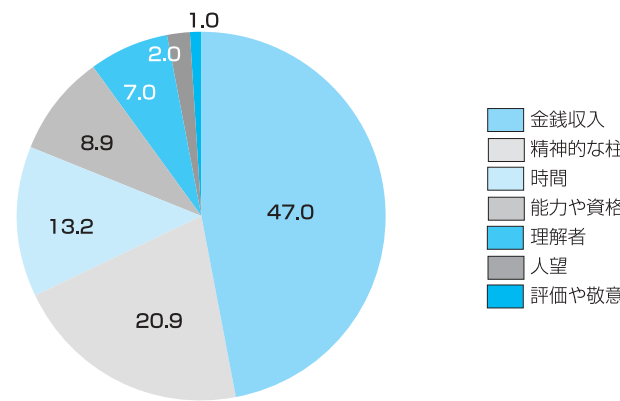
■『明』の人の一番欲しいもの



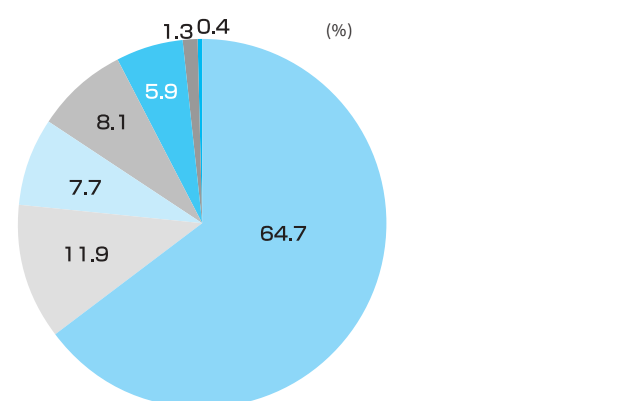
■『我』の人の一番欲しいもの



■『従』の人の一番欲しいもの



■『迷』の人の一番欲しいもの



クラスター間の差異は「現在一番欲しいもの」にも顕著に表れている。『迷』の人では「一番欲しいもの」が「金銭収入」に集中している。これは『迷』の人に若い人が多く世帯収入がほかより低いことに加えて不安や、将来に対する見通しの不透明さも影響していると考えられる。『我』の人「『明』の人」では「金銭収入」を挙げる割合は少ない。「金銭収入」に代わって『我』の人が求めているのは「精神的な柱」。人間関係のしがらみから自由である反面「孤独と背中合わせでもある。『我』の人の本音が見え隠れする結果といえる。また、『明』の人」では「理解者」「人望」「評価や敬意」など理解され、評価されることを求める人が2割にのぼっていることが注目される。

「お金」よりも欲しいもの

「生活とイメージしている。これに対し、『明』の人は「幸福な」「自由な」「自分らしい」というポジティブなイメージの選択率が高く、『迷』の人とは対極的な結果となっている。『我』の人では「自由な」「自分らしい」の選択率の高さが特徴的である。『従』の人ではポジティブなイメージとネガティブなイメージの選択率が拮抗し「生き方の点数」と同様「とくに良くもなく悪くもない生活」という意識が表れている。

分かれる「生活イメージ」

「生き方の点数」が最も低い『迷』の人は現在の生活を「平凡な」「不安な」「我慢

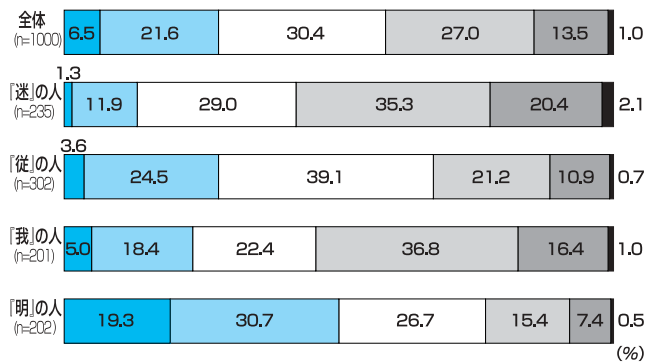
「満足できる生き方を100点とした場合の現在の生き方の点数」の全体平均は62.5点。「合格点」といったところだろうか。最も点数が低いのは平均が54.5点の『迷』の人である。「50点未満」が61人と多いことから「まだまだ満足できる生き方には達していない」と考えている人が多いことがわかる。これに対して『明』の人では平均が69.8点と『迷』の人を15点以上も上回り、現状を高く評価している。『従』の人の回答が60点や70点台に集中しているのに対し、『我』の人では分布が平坦で、回答の多様性が反映されている点も特徴的である。

「54.5点の生き方」「69.8点の生き方

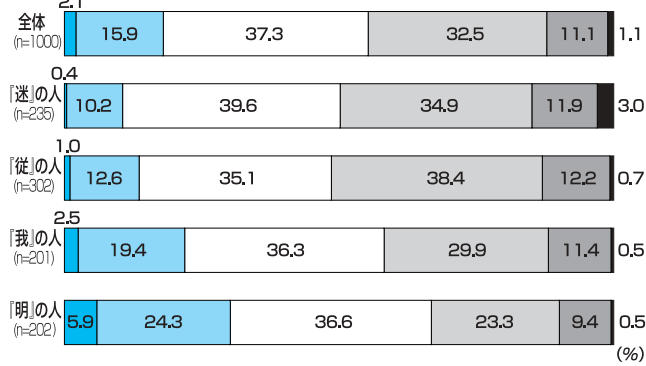
では「迷」「従」「我」「明」の人はそれぞれどのような生活を送っているのだろうか。ここではそれぞれの暮らしの「いま」について具体的な事からを通して見ていきたい。

それぞれの「生きる「いま」

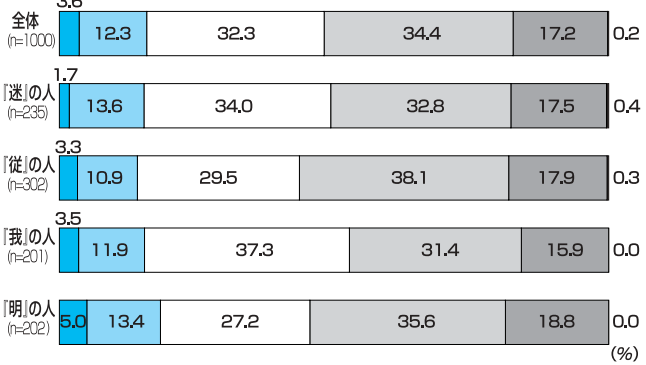
■近所づきあいや地域のサークル活動に積極的に参加する



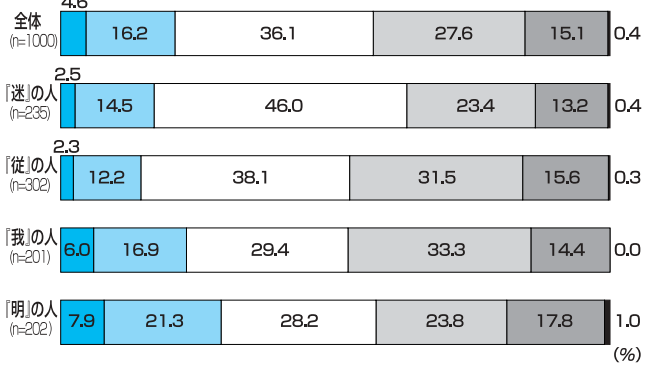
■多少他人に迷惑をかけることになっても、自分の主張は通したい



●家族のレジャーや行事に支障があっても、自分自身の都合を優先したい



●家事や育児や介護などできるだけ外部サービスを利用して、個人の生き方を尊重すべきだ



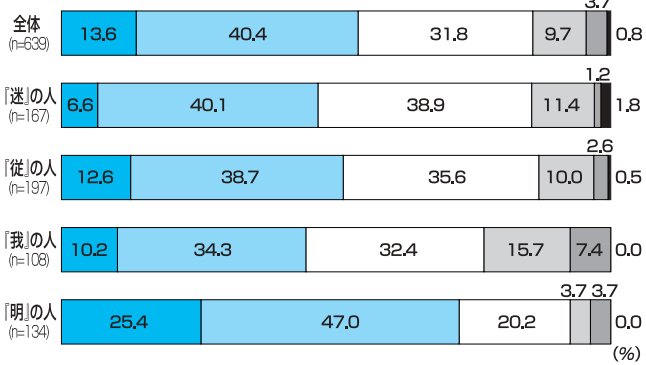
■あてはまる ■どちらかといえばあてはまる ■どちらともいえない ■どちらかといえばあてはまらない ■あてはまらない ■不明

「家族のレジャーや行事に支障があっても、自分自身の都合を優先したい」と考える人は15・9％と少ない。「家事や育児や介護などできるだけ外部サービスを利用して、個人の生き方を尊重すべきだ」という考え方に対しては、反対者の数が賛成者の数を上回っている。家族の存在を重視し、家事や育児、介護などではできるだけ自分たちの手でやりたい、と考える人が多いことがうかがわれる。

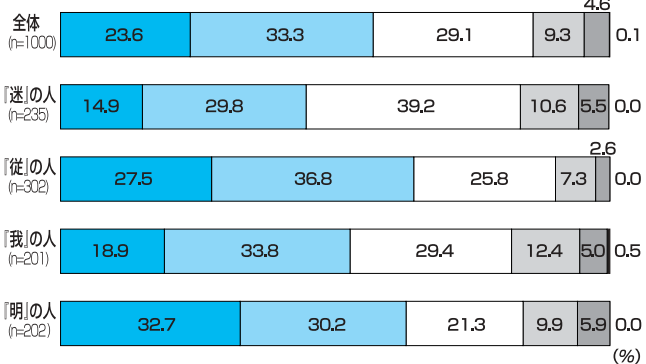
クラスター別に見ると、とくにこのような考え方が強いのは『従』の人である。『従』の人では「最も頼れるのは家族だ」と考えている人が64・3％にのぼり、外部サービスの利用に賛成する人は14・5％と、4クラスターの中で最も少ない。一方『明』の人では、外部サービスの利用に賛成する人の割合が29・2％と、他クラスターと比較して多くなっている。家族のあり方に対する考え方が柔軟で、外部サービスなどを合理的に取り入れようとする人が比較的多いといえる。

『迷』の人では、外部サービスの利用について「どちらともいえない」とする人の割合が46・0％と高く、自分の希望する家族像や家族のあり方に対する考え方が明確になっていないことがわかる。これには、未婚者の割合が高いことに加え、自分自身の生き方や価値観が定まっていないことや、将

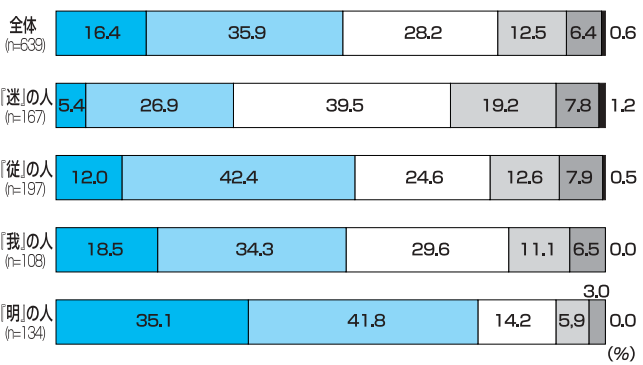
■サラリーマンであれば、転勤や異動などの組織の指示に従うのは当然である



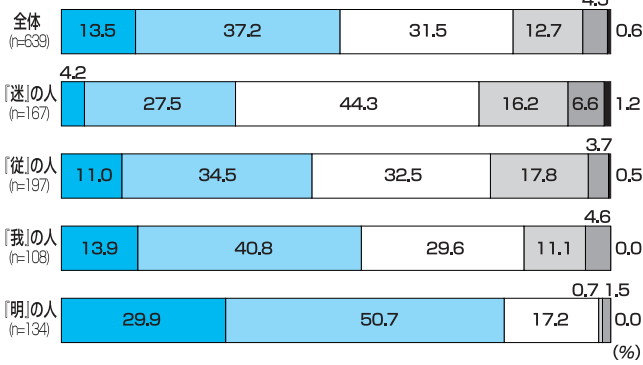
●自分の悩みや問題の相談で、最も頼れるのは家族だ



■現在の仕事は、自分の能力や個性を発揮するのに適した、働きがいのあるものだ



■自分の仕事上の専門能力は、違う会社でも通用する自信がある



■あてはまる ■どちらかといえばあてはまる ■どちらともいえない ■どちらかといえばあてはまらない ■あてはまらない ■不明

現在の仕事の働きがいと
違う会社でも通用する自信

より具体的に、仕事に対する考え方や感じ方はどうだろうか。

現在収入のある仕事をしている人を対象に、仕事に働きがいを感じているかどうか、違う会社でも通用する自信があるかどうかを尋ねてみた。全体では、働きがいを感じている人は52・3％、違う会社でも通用する自信を持つ人は50・7％と、ともに約5割となっている。

クラスター間の比較からはやはり『迷』の人の不満と自信のなさ、『明』の人の満足感と自信の高さが際立つ。『迷』の人では、働きがいを感じている人は32・3％、違う会社で通用する自信を持つ人も、31・7％にとどまっている。現在の仕事に働きがいを感じられないが、違う会社で通用する自信があるわけでもない…そんな『迷』の人の閉塞感がうかがわれる。

これに対し、『明』の人では、働きがいを感じている人は76・9％、違う会社で通用する自信を持つ人の割合も80・6％と高い。現在の仕事に働きがいを感じてはいるが、もし他の会社に移るようになったとしてもやっていける、という自信が表れている。働きがいを感じられていることこそが、違う会社でいつでも通用する自信を持つ

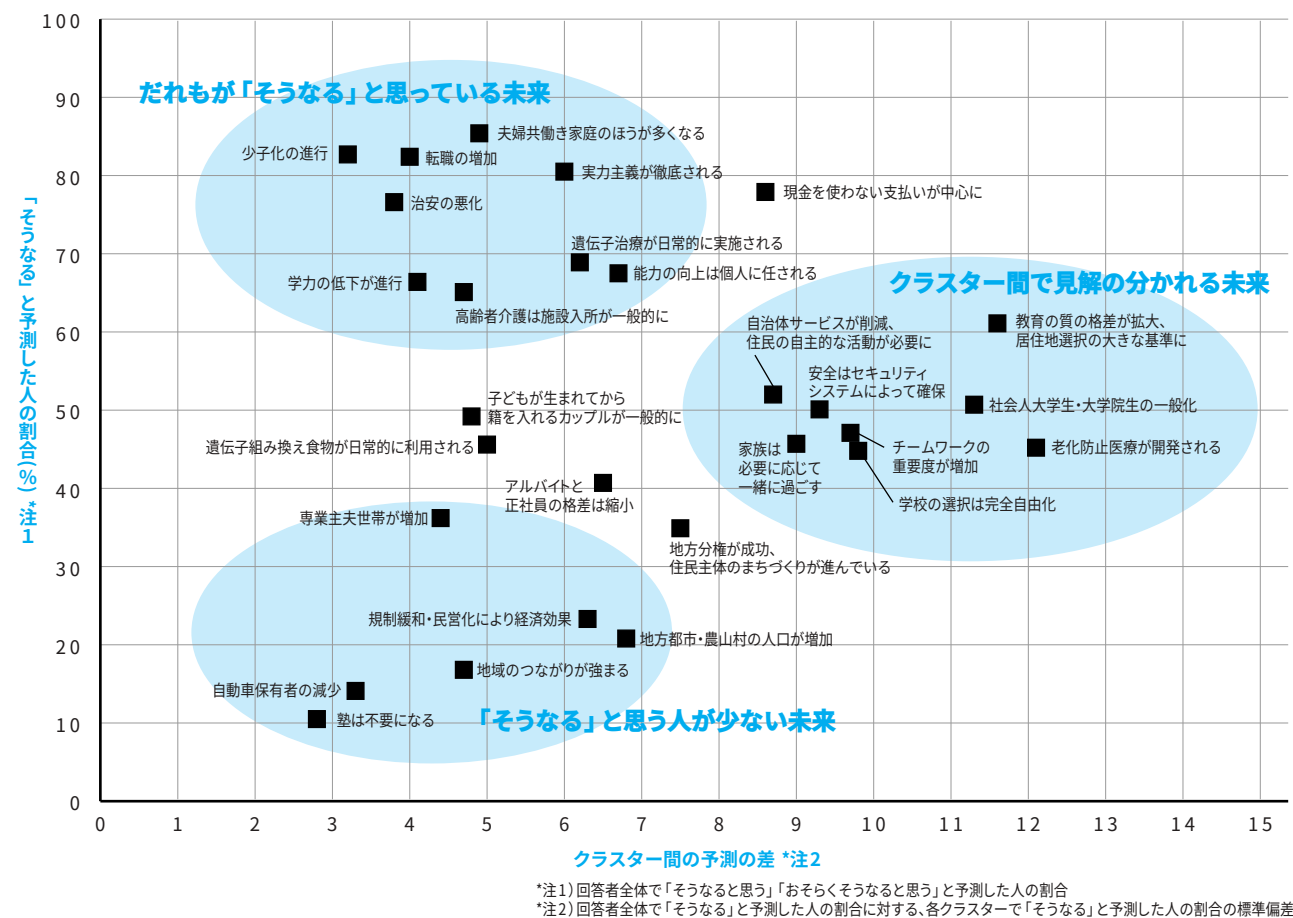
『明』の人を現在の仕事につなぎとめていくという見方もできるだろう。

『従』の人、「我」の人では、働きがいを感じている人はいずれも約5割であるが、違う会社で通用する自信を持つ人の割合は、『従』の人でやや低くなっている。これは、『従』の人が仕事をする上で、能力や適性のほかにも職場や仕事相手との人間関係を重視することによるものと推測される。

「サラリーマンであれば、転勤や異動などの組織の指示に従うのは『当然である』」と考える人は、『明』の人で72・4％と最も多い。最も強く抵抗感を示すのは、『我』の人で、「指示に従うのは当然」と考える人は44・5％にとどまっている。『明』の人の高い満足感には、「組織の中で働く」という状況への適応力の高さが影響しているといえるだろう。

家族との関係や家族のあり方について尋ねた結果からは、全体的に、家族の存在を重視し、一緒に過ごす時間を尊重する人が多いことが示されている。「自分の悩みや問題の相談で、最も頼れるのは家族だ」と考える人は全体の56・9％と過半数を占め、

■それぞれの描く「これから」：10年後の日本社会に関する予測



これまで見てきたように、4つのクラスターの生き方はさまざまな面で異なっている。では各クラスターが描く未来には違いがあるのだろうか？

ここでは、10年後の日本社会に関するさまざまな事柄について予測を求め、クラスター間での比較を行った。

10年後の日本社会を描く

上の図は、10年後の日本社会に関するさまざまな事柄がらについて、縦軸に「そうなる」と予測した人の割合を、横軸にクラスター間での予測の差の大きさをとって座標上に表したものである。このように整理してみると、「仕事」や「家族」などの領域を超えた、いくつかの予測のパターンが浮かび上がってくる。

クラスターを超えて共有される慎重な未来観

予測のパターンのひとつは、「だれもが『そうなる』と思っている未来」。クラスター間の予測の差が小さく、「そうなる」と思う人の多い未来である。

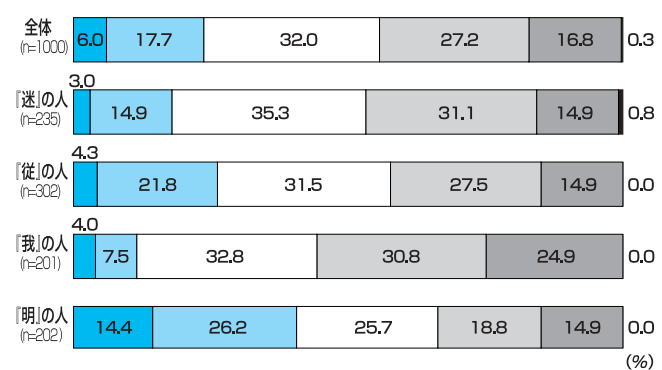
ここには、「少子化が今後も進行し、子どもの数はますます減少している」「ひとつの会社に定年まで勤めるという意識は弱ま

り、転職はいま以上に増加している」「凶悪な犯罪が増加して治安が悪化し、自分の安全は自分で守らなくてはならなくなっている」「専業主婦のいる家庭よりも、夫婦共働き家庭の割合が多くなっている」「会社組織の中では、年齢よりも実力主義・成果主義が徹底されている」など、メディアでも社会現象や社会問題として取り上げられることの多い事柄が含まれている。

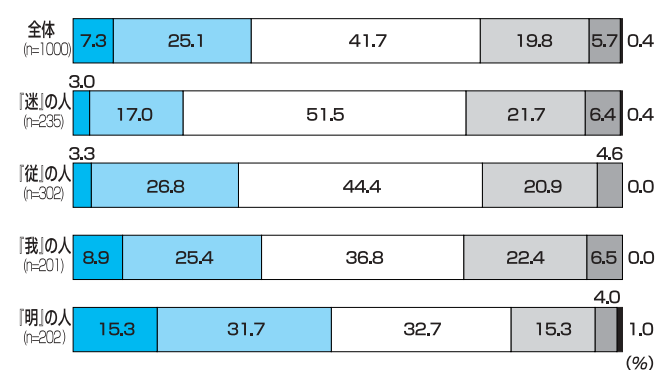
反対に、「そうならない」という見方が共有されているものもある。ここには、「塾に行かなくても学校で十分指導を受けられるようになっている」「自動車保有者が減少している」「地域住民としてのつながりの意識が強まっている」などが含まれている。

少なくとも10年というスパンでは、今日日本社会が抱えている課題が大きく改善されることはない。そんな慎重な未来観が、クラスターを超えて多くの人の間で共有されていることがわかる。

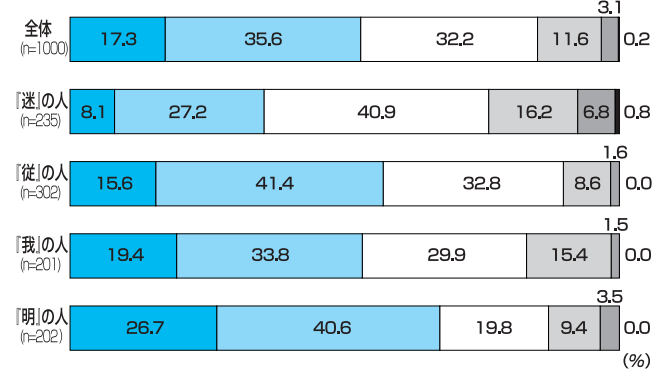
●ものを買うのを我慢しても、つきあいや携帯電話、メールなどのコミュニケーション費用は割れない



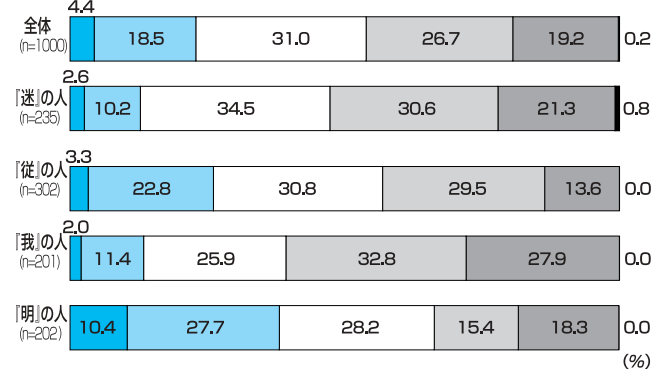
●自分の収入は、将来への貯蓄よりも、現在の充実のために使ったほうがよいと思う



●生鮮食品などを買うときは、値段よりも安全性や品質を重視する



●服装は、流行に乗り遅れないように気を配っている



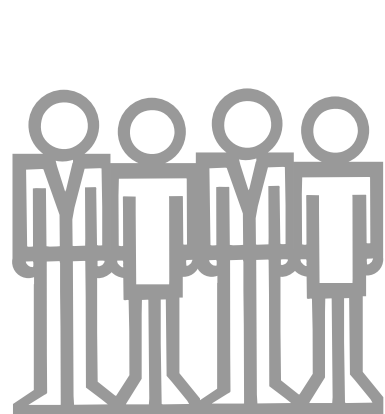
■あてはまる ■どちらかといえばあてはまる ■どちらともいえない ■どちらかといえばあてはまらない ■あてはまらない ■不明

価値観の違いが表れた「お金の使い方」

最後に、ものの購入やサービスの利用のし方について考えてみたい。全体的な傾向として注目されるのは、安全性や品質に対する意識の高さと、流行に対する関心の低さである。「生鮮食品などを買うときは、値段よりも安全性を重視する」「人の割合は52.9%と半数を超えているのに対し」「服装は、流行に乗り遅れないように気を配っている」「人の割合は、全体の22.9%と少数派である」。

クラスター間で比較すると、流行に対する関心は『従の人』と『明の人』で高くなっている。流行への関心の高さには『従の人』と『明の人』に共通する、対人関係に対する関心の高さが影響していると考えられる。これと似た傾向が、コミュニケーション費用に対する考え方にも顕著に表れている。とくに『明の人』では、「ものをを買うのを我慢しても、コミュニケーション費用は割れない」と考える人の割合が40.6%に達しており、生活における「コミュニケーション」の優先度が高い。『我の人』ではこの割合が11.5%にとどまり、『明の人』と対極的な結果となっている。

「自分の収入は、将来への貯蓄よりも現在の充実のために使ったほうがよいと思



う」かどうかを尋ねた結果では、全体の32.4%が「どちらかといえばあてはまる」と答えている。

クラスター別に見ると、この割合が最も低いのは「現在一番欲しいもの」に「金銭収入」を挙げる人の多かった『迷の人』である。『迷の人』では、「どちらともいえない」人が51.5%と半数を超えている。将来への不安が先に立ち、具体的にはお金の使い方についての方針が定まっていな人が多いことがわかる。

現在の充実のためにお金を使うのがよいと考える人が最も多いのは『明の人』で、次いで『我の人』となっている。自分の生き方や価値観が明確である程度将来への見通しがあることが、「現在の充実のために収入を使っても大丈夫」という自信につながっているといえるだろう。

見解が分かれた「教育問題」「家族」「チームワーク」の今後

もうひとつの特徴的なパターンは「そうなる」と思う人の割合がクラスターによって異なる事がある。

上の図では、クラスター間で予測が分かれたものの中から、特徴のあるものについて、1ダイチャートと比較している。4本の線は、それぞれのクラスターで「そうなる」と思う人の割合を示すものである。

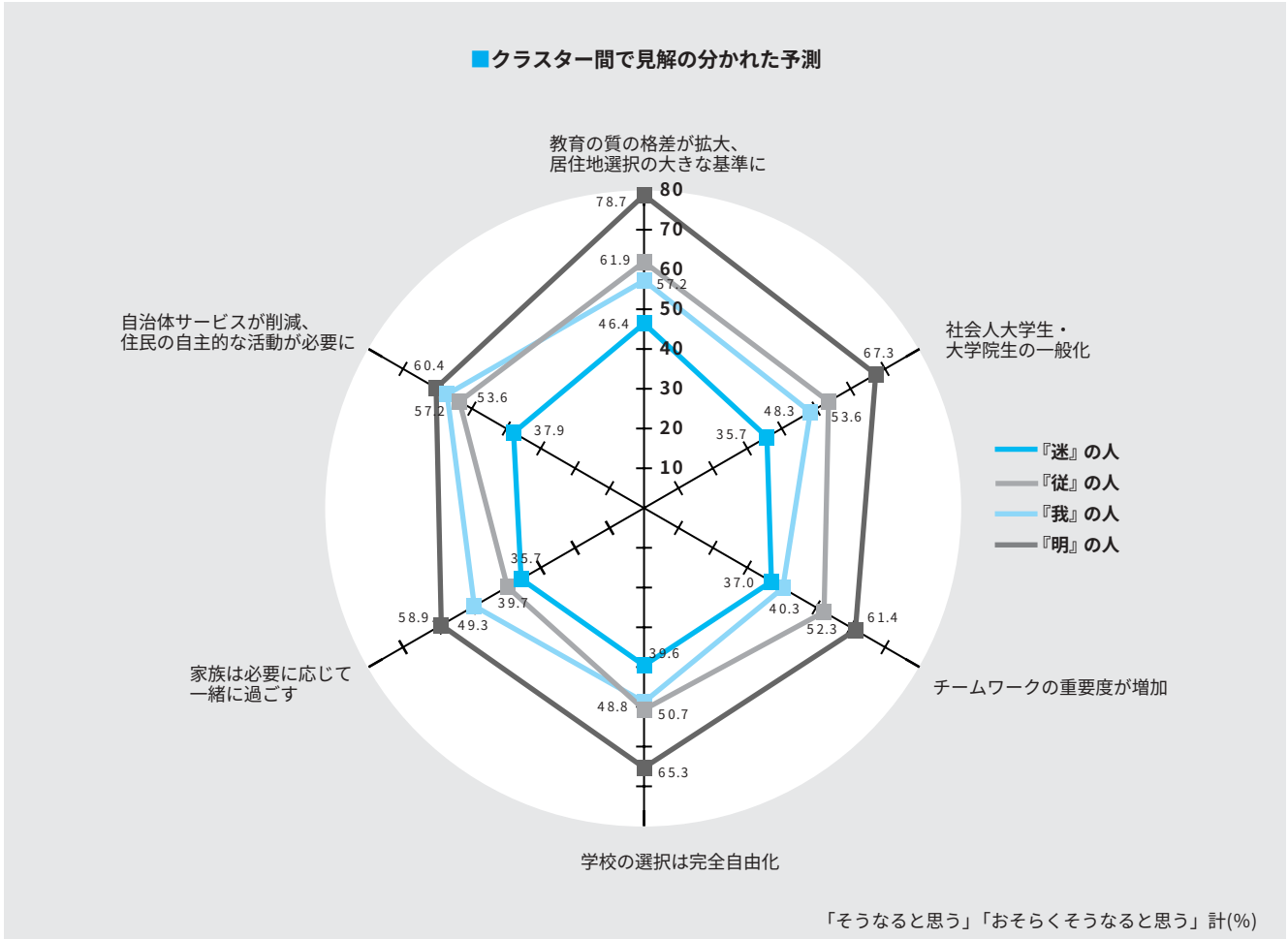
全体的な傾向としては、4本の線によって開かれる「面積」が異なっている点が目される。この面積の大きさは、『明』の人で最も大きく、『迷』の人で最も小さくなっている。これは、『迷』の人で「どちらともいえない」という回答が多く、積極的に「そうなる」と予測する人が少ないことによるものである。4つのクラスター間の、未来に対する見通しの明確さや主体性の強さの表れといえよう。

クラスター間の差が最も顕著に表れたのは、「教育の質の格差が拡大し、居住地選択の大きな基準になつていく」という予測である。ほかにも、「社会人大学生・大学院生の一般化」、「学校の選択は完全自由化」と教育問題に関する予測について、『明』の人でとくに「そうなる」と考える人の割合が高くなっている。教育の機会とは与えられる

ものではなく、自ら選択し、獲得していくものになつていくという、『明』の人の意識の強さがうかがわれる。

『従』の人に特徴的な予測としては、『家族は生活を共にするもの』という意識は弱まり、必要に応じて「一緒に過ごすようになつたりとつていく」と予測する人が少なく、「チームワークの重要度が増している」と予測する人が多いことが挙げられる。『我』の人では、これと対照的に、「チームワークの重要度の増加」を予測する人が少なく、「家族は必要に応じて一緒に過ごすようになつたりとつていく」と予測する人が多くなっている。『従』の人と、『我』の人の「つながり」に対する考え方の違いが浮き彫りになつた結果といえよう。

現在の状況を伝えることは異なり、未来に関する予測、とくに「まだ」「そうなる」とも「そうならない」とも言い切れないような事柄についての予測は、それぞれの価値観が表れやすい部分である。『明』の人は主体的に選択し、自らの手で望むものを獲得していく未来を、『従』の人は「つながり」の重要性が増す未来を、『我』の人は「個」が中心となる未来を、というように、それぞれの強みや弱み、自信や不安が反映された結果が、未来像として描かれている点に興味深い。



それぞれの「つまみ」をつまみ、それぞれの「迷」から脱する

本レポートでは、調査回答者を4つのクラスターに分け、それぞれが生きている「いま」、描いている「これから」について見てきた。最後に各クラスターの特徴を整理し、それぞれの今後について考えてみたい。

「迷」から脱する

『迷』の人は、希望する生き方や価値観が定まらず、周囲からも孤立した状態にある。将来に対する見通しも不透明である。しかし、現状のままで良いとは思っていない。それは、「現在の生き方の点数」の低さや、自分の生活について「不安」や「我慢」といったネガティブなイメージを挙げる人が多いことに表れている。彼らが「満足できる生き方」に近づき、自分の生活に「自由」や「自分らしさ」「幸福」といったポジティブなイメージを抱くことができるようになるためには、何が必要なのだろうか。

『迷』の人の回答は概して消極的で、「どちらともいえない」という回答の多が目立っている。このクラスターの満足度や自信の低さは、判断や行動の「基準」となるものを見つけれないことに起因しているように思われる。20代・30代の多いクラスターであることから、多様な選択肢を知り、その

中から選びとっていくのは、これからとも考えられる。しかし、これまで自分の価値観について突き詰めて考えたことがない場合や、考えてはいても判断を先送りしている場合には、今後、「どちらともいえない」状態が続いていく恐れがある。

「どちらともいえない」という回答が多くなる原因のひとつは、「正解」のない問題に対して「正解を見いだそうとすることではないだろうか。しかし実際には、「家族のあり方」や「お金の使い方」など、万人に共通の「正解」がなく、自ら意思決定をしなければならぬ問題が多い。基準が定まらなければ、人からの評価や状況に左右され、判断や行動の一貫性を保つことが難しくなる。いずれかを選ぶことによつてはじめて目標が定まり、その実現に向けて行動することができるのである。

『迷』の人は、「正解を見つけない」というのではなく、「自分なり」の答えを持つことによつて「迷」の状態から脱し、それぞれ

がそれぞれの「満足できる生き方」に近づくことができるのではないだろうか。

「従」の存在から「主」の存在へ

『従』の人は、自分の価値観を主張することよりも、周囲の人と良い関係を築き、維持することに重きを置いている。調和を保つために我慢もしているが、幸せを感じている人も少なくなく、現在の生き方の点数も低くない。厳しい見方をすれば、流さず、周囲に依存して生きる人、肯定的な見方をすれば、大きな流れに身を任せ、与えられた枠の中で自分なりの幸せを見いだすことができる人である。

従来の「イエ社会」「うう社会」と呼ばれる社会の中では、「家族」や「会社」、「学校」など、与えられた枠の規範に従い、流れに身を任せることが、居心地の良い居場所を確保し、「幸福」や「豊かさ」を得ることにつながる。とされてきた。4クラスターの中で最も人数の多い『従』の人は、そのような社会に適応的に生きるための性質を備えた人といえる。

しかし、すでに進みつつある「転職の増加」や「共働き家庭の増加」といった変化は、「家族」や「会社」など、生活の基本となるさまざまな場面で、従来の枠組みを壊しはじめている。「幸福」や「豊かさ」は、既存の枠組み

に沿って生きることによつて自然に得られるものではなく、主体的・能動的に獲得していくべきものになりつつある。

『従』の人の重視する「人と人とのつながり」も例外ではない。家族のあり方を例にとれば、調査結果からは「家族は生活を共にするもの」という考え方も変化していく可能性が示唆されている。家族は「生活を共にするもの」であるべきなのか、あるいは「必要に応じて一緒に過ごすようになつたり」で良いのか、という問題ひとつをとっても、自分がどのようなあり方を希望しているのかを自覚し、主張していくことの必要性がますます高まっている。

これまで「従」うことによつて自然に得られてきた「平凡な幸せ」さえも、自覚的に追求しなければ、得ることが難しくなっていく。そのことは、『従』の人にとつて簡単なことではないかもしれない。しかし、自らの「主」であろうとすることは、より能動的に「幸福」や「豊かさ」を感じることもつながるはずである。

「我」を支える関係の構築

『我』の人は、人からの期待や評価にとられず、自らの価値観に従つて行動することを重んじている。現在の生き方の点数は、『明』の人に次いで高く、自分の生活は

「自由」で「自分らしい」ものと感じている。

一方で『我』の人には、現在一番欲しいものとして、自分ならではの生きがいや、精神的な柱となるものを挙げる人が多く、対人関係のしがらみやわずらわしさからの『自由』は、孤立と胥中合わせであることが示されている。

「生きがいや精神的な柱となるもの」は必ずしも「人」である必要はない。しかし、『我の人』にとって、周囲の人と良好な関係を築くことは、自分自身の能力を引き出し、活かしていく上でも有効である。人との関わりを通して新たな「自分」を発見したり、自らの生き方や価値観を見直す経験は必ずしも「自分らしさ」を阻害するものではなく、むしろ促進するものではないだろう。

『我』の人の、自分は自分、他人は他人」という、一見、人に対して無関心な姿勢は、周囲の人との摩擦を回避しようとする傾向の表れでもある。「ものを買うのを我慢しても、コミュニケーション費用は削れない」と考える人の少なさからも、『我』の人づきあいに対する消極性や関心の低さがうかがわれる。自分の価値観を主張しつつ周囲の人との良好な関係を築くためのコミュニケーション能力を身につけることが、『我』の人の強みを活かすことにもつながるのではないだろうか。

「明」を自ら問い続ける

「明」の人は、自分自身をよく理解し、自分の価値観に従つて主体的に生きており、人づきあひに対しても積極的である。幸福感が高く、現在の生き方に対する自己評價も高い。非の打ち所のない、理想的な生き方のように思われる。

そんな『明』の人に課題があるとすればそれは「理想的であること、あらうとすること」ではないだろうか。

『明』の人は、自分の価値観に従つて主体的に生きる一方で、人から認められ、評価されることを強く求めるという側面を持つてゐる。人の声に耳を傾け、その評価を得ようとすることは、向上心と成長につながる一方で、意識的・無意識的に周囲の人や集団の意図に沿うような判断・行動の選択を招く危険を孕んでいる。「サラリーマンであれば、組織の指示に従うのは当然である」と考える人が他クラスターと比較して多いという結果は、『明』の人の過剰ともいえる適応力の高さを物語っているといえよう。現在の生き方に対する自己評価についても同様である。迷いがないこと、価値観が定まっていることは、裏を返せば、現在の自分に対して疑問を抱かないということでもある。

『明』の人の構成メンバーに着目する

と20代・60代の自分自身の生活や人生に対する裁量性が高い年代が占める割合が高くなっている。最も割合が低いのは30代でこの年代には『迷』の人が多い。それはこの年代がさまざまな転機を経験する時期であり、それまでの生き方や価値観が揺さぶられ、再構築を迫られる時期であるためと考えられる。「迷うこと」自体は決して否定すべきことではなく、むしろ必要なのプロセスであるといえよう。

周囲の期待に応えること「理想的であること」に重きを置きすぎて、自分自身の真の満足や幸福を見失ってはいないか。『明』の人は、つねに自分自身に対して問い続ける必要があるのではないだろうか。

「迷」「従」「我」「明」の築く豊かな未来

「個」のレベルでつねに「明」の状態にあることが理想とは限らないということは「社会」のレベルでもあてはまる。

簡単に答えを出すことにためらいを感じる『迷』の人。人と人とのつながりを重視し、流れに身を任せることを知る『従』の人。人や社会の価値観にとらわれることなく、自らの道を追求する『我』の人。そして、適応力に長け、前向きに生きる『明』の人。

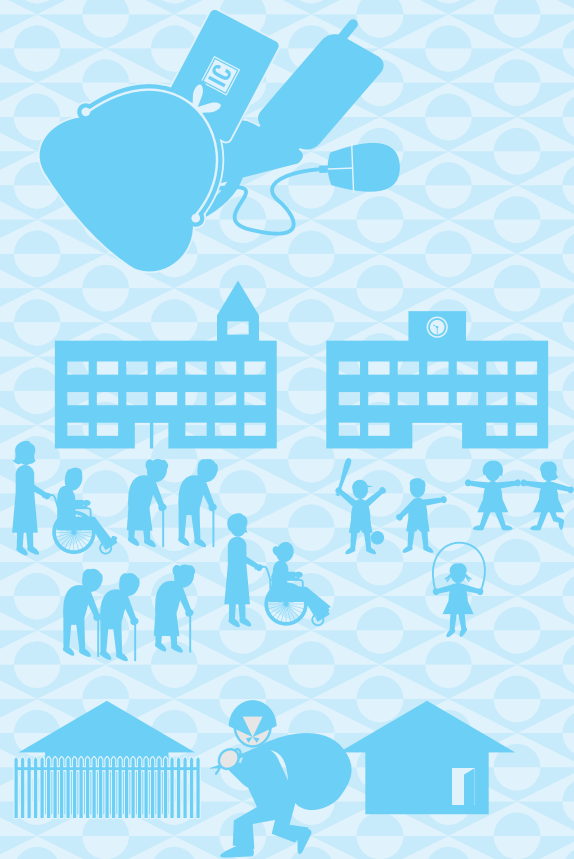
尺度項目の出典論文

- 榎本博明・林洋一・鈴木貢(1986)青年期における自己実現傾向について(Ⅰ) - 自己実現質問紙作成の試み - 日本社会心理学会 第27回大会発表論文集、131-132.
- 加藤藤雄・高木秀明(1980)青年期における独立意識の発達と自己概念との関係 教育心理学研究、28、336-340.
- 久世敏雄・和田実・郎曉亮ほか(1988)現代青年の規範意識と私生活主義について 名古屋大学教育学部紀要 - 教育心理学系 -、35、21-28.
- 斎藤和志・中村雅彦(1987)対人の志向性尺度作成の試み 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学系)、34、97-109.
- 坂柳恒夫(1999)成熟キャリア成熟尺度(ACMS)の信頼性と妥当性の検討 愛知教育大学研究報告、48、115-122.
- 菅原健介(1984)自意識尺度(self-consciousness scale)日本語版作成の試み 心理学研究、55、184-188.
- 榎野淵(1988)社会的技能研究の統合的アプローチ(Ⅰ) - SSIの信頼性と妥当性の検討 - 関西大学大学院(人間科学)、31、1-16.
- 山岡重行・押見賢男(1986)新ユニークネス尺度の作成と検討 日本グループ・ダイナミックス学会 第34回大会発表論文集、219-220.
- 山口勲・岡崎・丸岡吉ほか(1988)合意性の推測に関する研究(Ⅰ) - 集団主義的傾向との関連について - 日本社会心理学会 第29回大会発表論文集、176-177.

同じ社会の同じ時代を生きていても、それぞれを描く未来は少しずつ異なっている。『迷』の人が感じている、不透明な未来に對する不安。『従』の人の持つ人と人とのつながりへの期待。『我』の人の『個』が重視される社会への希望。そして、『明』の人の、自ら未来を切り拓いていくという意識。それぞれがそれぞれのより良い生き方を追求する中で、多様な価値観がせめぎあい葛藤しながら紡ぎだされていく社会こそ、真に豊かな社会といえるのではないだろうか。

日本人の生き方・暮らし方

HR―生き方リサーチデータ―
《調査結果の抜粋》



H R I では、人々の暮らしと価値観を知り、それらを近未来社会の展望につなげるため、2001年度より3年間、「シニア世代（50～70代）」「ミドル世代（35～49歳）」「ヤング世代（20～34歳）」それぞれについて、ライフスタイル調査を実施してきた。

今年度は、これらの調査結果を参考にしつつ、日本人のライフスタイルの全体像を把握することを目的として、すべての世代を対象とした世代横断型の調査を実施した。

して、すべての世代を対象とした世代横断型の調査を実施した。

● 調査方法 WEBアンケート（50・60代では、

郵送調査も並行して実施)

● 調査期間 2004年10月12日～11月3日

●調査対象 全国の20～69歳の男女

● サンプル数 WEB調査：1000サンプル

郵送調査：423サンプル

《性別·年齡》

					(人)
		男性	女性	小計	合計
WEB調査	20～29歳	100	100	200	1000
	30～39歳	100	100	200	
	40～49歳	100	100	200	
	50～59歳	100	100	200	
	60～69歳	100	100	200	
調査送付 ⑦	50～59歳	91	112	203	423
	60～69歳	106	114	220	

■ 郵送調査による50～60代のデータは参考データとして挿入。(該当データに㊦を表示)

■「全体」および「性別」データには郵送調査のデータは含まない。

《居住地》

